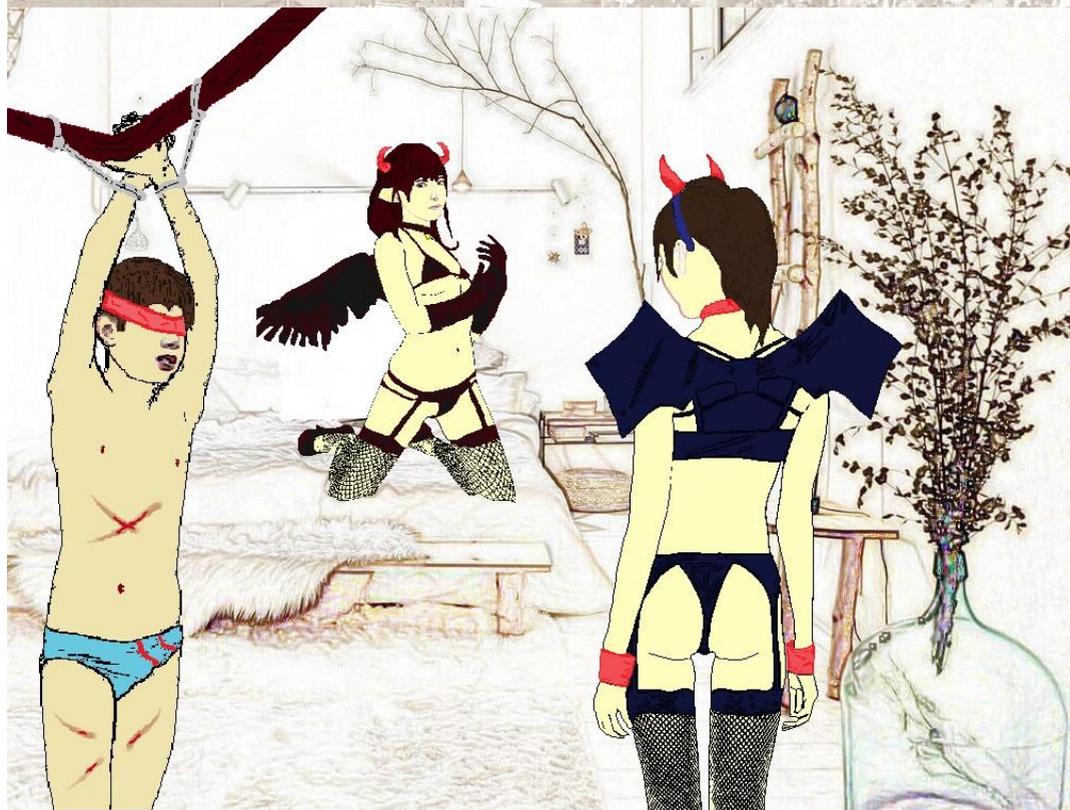


昭和ノスタルジー／筈の悦虐（シヨタマゾ）

# 女神様と王女様と いとこの(下)僕



原 案 W I L L 様  
小説化 濠門長恭

# 目次

伯父の家に.....	- 2 -
従妹と入浴.....	- 6 -
入部の儀式.....	- 13 -
従姉の悪戯.....	- 16 -
土曜の特訓.....	- 22 -
メコ筋に鞭.....	- 32 -
アナル快感	- 47 -
口封じの夜	- 56 -
夜のお散歩	- 74 -
真夏の幻想	- 83 -
二人の先輩	- 107 -
SMショー	- 116 -
僕の初舞台	- 154 -
後書き	- 180 -

## 注記

※本作品はフィクションです。実在する歴史・固有名詞・年齢などとは関係ありません。

※教育漢字+αの漢字遣いをしています。

「着替え→着変え」「賜物→玉物」などの当て字もあります。校正ミスではありません(かなあ……)。また、物語の進展と共に、学習した漢字が追加されていきます。

## 伯父の家に

田園調布に家が建つ。

去年（昭和57年）に流行ったギャグ。実際の田園調布は知らないけれど。きっとこんなだろうなって風景が、目の前に広がっている。

3ナンバーが余ゆうですれちがえる広い道。スピードを出せないように、わざと曲がりくねっている。両側には、広い庭付きの大きなてい宅。住宅なんてせせこましい単語はふさわしくない。

3日前から、僕はここに住んでいる。なんかエトランゼになった気分——なんて、気取ってみる。明後日からは、新しい制服に身を包んだピカピカの1年生。もう子供じゃないんだから。父母がそろってヨーロッパへ長期出張してるあいだ、伯父さんの家でお世話になるくらい、ちっともさびしくなんかない。

だけど。父さんってえらいんだと、あらためて思った。会社の見送りの人が20人以上。総合商社『丸木商会』の市場開発担当副社長だもの。もっとも、社長は父さんのお兄さん——目の前でベンツのハンドルをにぎってる剛<sup>つよし</sup>伯父さんだから、うん、兄が弟よりえらいのは当然だね。

ちなみに、当然だけど伯父さんも僕も苗字は佐渡<sup>さわたり</sup>。名前は、父さんが<sup>まなぶ</sup>字で僕が<sup>ひよし</sup>均。1文字なのが、佐渡家の伝統らしい。

ベンツが一たん停止すると、庭の門が自動的に開いて、そのまま乗り入れる。ガレージに車を入れる前に、僕だけ先に降りた。

「おかえりなさい」

美鈴ちゃんが飛び出してきた。ポニーテールをなびかせながらかけ寄って、抱きついて

くる。おしたおされそうになった。背だけはほとんど変わらないけど僕よりは少し軽い(と思う)から、受け止められたけど。

さっきは、さびしくないって言ったけど。正確には、にぎやかでうっとうしくて楽しい。

美鈴ちゃんは下の学校の最上級生。妹みたいになつてくれてるんだけど、7月生まれなので、僕と7か月しかちがわない。同級生だって、8か月くらい上の子がいる。その子と比べても、美鈴ちゃんは発育が早いんじゃないかな。身長とか体重の話じゃなくて——今も、僕のうでに胸をおし付けてるんだけど、そっちの話。なので、とまどってしまう。うっとうしいってのは、ちょっと言い過ぎた。

「美鈴。そんなにひつつかないで、はなれなさい。均くん、困ってるわよ」

エントランスに「楽しい」最大の理由である美竹さんも出て来て、妹をたしなめる。

困ってはいないけど、美竹さんに見られてるのがはずかしいというか、誤解されたくないというか。

美竹さんは美鈴ちゃんの姉。2コ上の学年で5月生まれだから、僕とは2才半の開きがある。ふんい気も『そっち』も、完全にお姉さん。付け加えると、美人。妹のポニテに對してツインテ。

姉妹だからふたりは似てるんだけど、美鈴ちゃんは『可愛い』系かな。おとなしくしていれば、だけど。

「困ってなんか、ないよね。今日から家族なんだから、妹がお兄ちゃんにあまえるのは当然でしょ」

「なに、わけの分からないことを言ってるの。均くんが来てから3日になるというのに」

「だって、昨日までは帰るおうちがあつたじゃない。でも、今日からは、ここが均お兄ちゃんのおうちになったんだもん」

両親の出張は短くて2年。たぶん3年以上になるから、その間も家賃をはらうのはムダ。というわけで、今朝、マンションを明けわたして——美鈴ちゃんの言う通り、僕の帰る家はここだけになった。

「もう、にげられないよ？」

美鈴ちゃんが、いたずらっぽくほほ笑んだ。それって……お休みのキス（ほっぺにしてあげたよ）とかよりも激しくアタックするって意味だろうか。女の子からのラブアタックが、うれしくないわけがないけど。でも、困る。僕が愛をささげたいのは、美竹さんだから。

うわあ。脳内で思っただけで七転八とう。『愛』だなんて、少女マンガの世界だ。ぼくはただ、美竹さんが美しいと思って、立ち居ふるまいもおしとやかで、あこがれてて——でも、遠くの花としてながめるんじゃないくて、ふたりで映画を観に行ったり、きっ茶店で映画の感想を話したり、遊園地もいいかな。ジェットコースターなんかより、ボートでふたりっきりで……は、無理だな。わがまま盛りだくさんの美鈴ちゃんが絶対にくっついてくる。

ほんと、美鈴ちゃんはあまやかされて育った王女様みたいに、なんでも自分の思う通りになると思ってる。そこへいくと、美竹さんは女神様みたいに美しくて、立ち居ふるまいも……あれ？ さっき言ったっけ？

「そうやってじゃれ合っていると、本当のきょうだいみたいだな」

伯父さんがガレージからもどってきた。

「しかし、いところ同士は結こんもできる男女のあいだがらだ。美鈴は、もうすこしつつしみなさい」

「はあい」

美鈴ちゃんが、やっとはなれてくれた。

美竹さんと美鈴ちゃんがエントランスに並んで、おくから出てきた伯母さんといっしょに、きちんと頭を下げる。

「おかえりなさい」

この家は、家族間でも礼義がきちんとしている。

「ああ、ただいま」

伯父さんに続いて、僕も家に入った。そのまま3階へ。

3階は、階段を上がった正面がろう下で、左右に部屋がある。手前の左が美竹さん、そのおくが美鈴ちゃんで、僕は一番おくの部屋。右側の3部屋は、今のところは物置。以前は、住みこみの家政婦さんの部屋にもなっていたそうだ。今も家政婦さんは2人やとっているけど『9 to 5』（おとしのコメディ洋画だけど、僕は観ていない）だから、家政婦さんが休けいするのはリビングのすみっこだし、子供部屋は自分でそう除する決まりなので、昼間でも家政婦さんが3階へ上がってくることはない。

あ、いきなり3階のことを説明したけど。1階は、エントランスと応接室と客間はふたつにバス・トイレ。トイレは各階にあるけど、さすがにバスルームは1階だけ。客間はともかく、エントランスは日本語で玄関だけど楽にたっ球ができる（観客コミ）広さがあるので、マンションを連想させる言葉のほうが適している。応接室も数十人規模で上映会ができるくらいに広い。

広いと言えば、2階のLDKもすさまじい。僕が4日前まで住んでいて、今朝に明けわたしたマンションは4LDKだったけど、それがまるまる収まりそうな面積がある。夫婦のしん室も、一家の<sup>あるじ</sup>主の書さいも、とにかくガリバーサイズ。子供部屋が6じょうという常識のはん囲なのが、ありがたい。勉強机とベッドと整理だんすと衣服のファンシーケースと本だなど専用の台に置いた16インチのテレビ。それでも、幼稚園児ならスモウが取れそうな空間が余っている。これ以上広いと、落ち着かないよ。

とりあえず部屋着に着変えて、ベッドにね転がって。することがなくなった。

まさか、入学前から予習をする気にもなれない。テレビは、あまり観ないほうだし。家から持ってきたテレビゲームは、もうあきてる。

ぼけっとしていると。伯父さんの言葉を思い出した。

「いとこ同士は結こんもできる」

僕にあまりベタベタするなって、美鈴ちゃんをたしなめた言葉だけど。結こんてのは、

つまりセックスなわけで……だきついてきたときに、うでに当たった小さいけど存在を主張してる胸のふくらみとか……エッチな方向へもう想が……ふくらましちゃダメだ。

美竹さんだったら、もっと大きくてやわらかくて、『胸のふくらみ』じゃなくて『乳ぶさ』……あこがれの人をけがすようなことを考えてはいけない。

「バカやろう……」

盛り上がってしまったズボンの前をデコピンして……いさめたつもりが、かえって大きくなっちゃった。

## 従妹と入浴

LDK——前の家と比かくするとLLLLDDKK（部屋の中に柱がある）くらいの部屋で一家4人プラス僕。ちんまりと夕食をすませた。ビーフシチューにコブサラダにデザートのアイス付きのごうかメニューだけど、部屋がだだっ広いので『ちんまり』と形容しちゃう。とにかく夕食をすませて。一家団らんでテレビ（26インチの大画面！）を観てるとき。

「今夜は、パパとママは後でゆっくり入るから、おまえたちが先におフロを使いなさい」

この家は、長幼の序とか家長（戦前の言葉だよ）とかがうるさい。おとついは、伯父さん>伯母さん>僕>美竹さん&美鈴ちゃんの順番だった。ので、今夜は僕がトップバッターか。なんだか申し訳ないな。

「それじゃ、お先に入ります」

自分の部屋へ着変えを取りにもどってから1階へ下りたら——だつ衣室で美鈴ちゃんが待っていた。

「いっしょに入ろうよ」

言葉だけじゃなくて、もうパンツ一丁になってる。前に赤いリボンが付いててレースの

ふち取りがしてある、グラビアアイドルが着るみたいな小さな——パンツというよりパンティ。美竹さんが着たら、すごくセクシーだろうけど、美鈴ちゃんには似合わない。

そりゃまあ……昔と比べたら、ふくらむところはふくらんでるし、お腹だって引きしまってきてるかな。そのぶん、お尻がヒップらしくなってる。だけど、やっぱり。小さいときのイメージが残ってるから、女子のセミヌードって感じじゃない。んだけど。クラスメートと半年くらいしかちがわないんだから。

「もう、そんな年ごろじゃないだろ」

美鈴ちゃんは、バスルームの前から動かない。「にげられないよ？」って、こういう意味だったんだ。

「伯父さんにしかられるぞ」

「どうして？」

「伯父さんも言ってただろ。僕たちは結こんもできるあいだがらなんだ。兄と妹じゃない」

「うわあ。あたしをオンナとして見てくれてたんだ。うれしいな」

「いや、そうじゃなくて……」

「お父様には言ってるよ。そしたら、ちゃんと背中を流してあげなさいって」

伯父さん、ムジュンしてない？

結局、年下の女の子におしきられてしまった。

「5年ぶりだね。あのときは、ぬぐの手伝ってくれたけど、今日はあたしが手伝ったげる」

5年ぶりというのは、今の（正確には今朝までの）マンションに入居するとき、引っ越しとかごたついて、1週間ほど住む所がなくなって、一家そろって、このてい宅に間借りさせてもらった——そのときのこと。美竹さんもいっしょに3人でおフロに入って。美鈴ちゃんが、ヒモのいっぱい付いた服を持って余して、美竹さんがぬがしてあげようとしたら、「ひとしおにいちゃん、ぬがせてよお」。あのころから、王女様だったな。なんて、過去をなつかしがってる場合じゃない。

美鈴ちゃんが僕のパンツに手をのぼしてきたので、あわてて自分でぬいだ。その直後のひと言で、立ち直れないくらいのダメージを受けた。

「小<sup>ち</sup>っちゃ……」

年下の女の子に言われたんだよ。伯父さんと比べてだったら平気だけど、もしも美鈴ちゃんの同級生と比べられたんだったら……

そりゃ、たしかに……修学旅行のときとか臨海学習とかで、クラスメートに負けてるなのは、痛切に思い知ってる。しかも、早熟な子は黒いポヤポヤまで生やしてるのに、僕はツルツル。

そんな僕の内心のジクジクは知らんぷりに、美鈴ちゃんもパンツをぬいだ。あわてて目をそらすいっしゅん前に、はっきりとそこを見てしまった。ツルツルだったので、ほっとした。

「早く入ろうよ」

美鈴ちゃんはタオル（こしに巻いたりもせず）片手に、僕のうでを引っ張る。

しかたがないので、僕もタオルを持ってバスルームへ入った。

子供部屋以外の部屋がやたらと広いのは、バスルームも同じ。銭湯の3分の1くらいはある。トン単位の水が必要なバスタブと、エアマットが4枚は広げられそうな洗い場。実際にエアマットがふたつ、かべに立てかけてある。それも1家族まとめて乗れそうな大きなやつが。

どうしていいか分からず、僕はぼけっとつつ立ってた。

美鈴ちゃんはテキパキ動く。バカでかいバスタブから湯をくんで、片ひざ立ててかけ湯をして。スモウのソソキョミみたいな座り方をして、二はい目の湯でスジを洗った。向きを変えて正面を僕に見せつけたのは、わざとだろうか。

「お兄ちゃんも、そこに座って。お湯をかけにくい」

「いや……自分でする」

かけ湯をして、そしたら次は湯につかるしかない。

美鈴ちゃんも入ってきた。サッカーチームが敵味方同時に入れるくらい広いのに、わざわざ僕の前へ来て——後ろ向きになって湯につかる。

「5年前みたいに、だっこして」

足の上におしりを乗せてきた。

「これじゃ、かたまでつかれない。足を広げてよ」

それだけ大きくなったってことだから、いっしょに入っちゃダメなんだよ——と言い聞かせて、聞いてくれる美鈴ちゃんじゃない。

僕がじっとしていると、おしりを左右にくねらせる。美鈴ちゃんの意図は分かってたけど、あきらめて足を開いた。とたんに、足の間におしりを割りこませて——さらに近寄ってきた。美鈴ちゃんの背中が胸に密着した。

女の子のやわらかい身体をだくみたいな形になって、心臓がきゅうっとねじられた。エッチな気分も少しはあるけど、後ろめたさのほうは百倍も強い。やっぱり5年前とはちがう。

「先に出るよ」

ふり切れるとは思わなかった。当然みたいに、美鈴ちゃんもバスタブから出て——エアマットのひとつを、洗い場に延べた。

「ここにねて。背中を流してあげる」

「いいよ。自分で洗うから」

「ダメよ。お父様にも言いつかってるんだから」

洗うのにお転がる必要なんてあるのかなと疑問に思いながら、郷に入りては郷に従え(ちがうと思う)。どんなふうに洗うのかなと好奇心も手伝って、マットの上でうつぶせになった。まさか、あお向けにはなれない。

美鈴ちゃんは洗面器に湯をくむと、ボディシャンプーを混ぜてバシャバシャとかき回し始めた。幼児のお遊ぎに『カイグリカイグリ♪』で、うでをぐるぐるさせるのがあるけど、そんな動き。たちまち、洗面器にあわが盛り上がる。美鈴ちゃんはそれを両手にすくって

——自分の身体にぬり始めた。かたからひざまで、真っ白のあわまみれ。

「じっとしててね」

僕におおいかぶさってくる。

「え……ちょ、ちょっと。何するんだ……？」

「だから、洗ってあげるんだってば。おまたにタワシがあつたら理想的なんだけど、スポンジのおはだで我まんしてね」

身体を密着以上におしつけてきて、うねうねくにくにくにと動かし始めた。

これって……ものすごくエッチなことをしてるんじゃないだろうか。

「美鈴ちゃん……こんな洗い方、だれに教わったんだ？」

「お母様がお父様にしてあげてるんだよ」

つまりそれって……伯父さんと伯母さんは日常生活は至極真面目なのに、夫婦ふたりきりになると、すごいエッチなことをしてるってこと？

伯父さんは父さんよりずっと年上だけど、伯母さんは母さんと同い年だっけ。精力がおとろえてきた伯父さんをこんなふうにちょう発して、ええと、つまり、夫婦の営みにさそってるのだろうか。

「ひゃっ……」

裏返った声を出しちゃった。というのも。美鈴ちゃんが僕の身体とマットの間に手をつっこんできて——もろにチンチンをさわったから。

「えええ？ こんなにしてあげてるのに、立ってないの？ あたして、そんなにみ力ないのかな……」

とんでもないことを言う。

「こうなったら、意地だよ」

強引に僕を転がそうとする。ていこうしたけど、ツルツルしたエアマットの上で、あわまみれの僕は簡単におお向けにされてしまった。なんか、すごく手慣れてない？

美鈴ちゃんがだきついてくる。

さっきは背中だったけど、今度は正面に、女の子のはだが密着する。胸のささやかなふくらみが、ずいぶん大きく感じられた。

さらに美鈴ちゃんは僕の足をこじ開けて腰をおしつけてきて……うわわわ！ 美鈴ちゃんのスジに、チンチンがはさみこまれた。僕だって、男と女がどんなふうにもセックスをするかくらい知っている。ほとんど、そんな状態——と考えてしまったら。

ドクンドクンドクン。チンチンが大きくなってしまった。それを美鈴ちゃんがにぎった。「あ、良かった。カセイなんだ。これなら、ダイジョウブだね」

もしかして、仮性ホウケイのことを言ってる？ それがダイジョウブってことは。まさか……セックスをするつもりじゃないよね？

「これだけ固かったら、処女マクを破れるかな？」

「ダメだよ。結こんしてもいけないのにセックスなんて……いや、そういう問題じゃない。とにかく、やめなさい」

できるだけ年上ぼく言い聞かせた。

「じょう談よ。あたしの年では、本番はしちやいけなくらい知ってるもん」

言いながら、美鈴ちゃんがこしをくねらせた。

く……チンチンがすごく気持ちいい。

「あっ……?!」

ズクン……気持ちいい感覚が最高に達して、こしのおくがけいれんした。びくびくっとチンチンがふるえる。

「なあんだ。あたしと同じで、まだなんだ」

美鈴ちゃんが立ち上がった。洗面器に湯をくみ直して——立ったまま、僕の顔にぶちまけた。

「うわっ……ぷ！ こら！」

あわてて起き上がろうとしたら、マットからすべり落ちてしまった。

美鈴ちゃんはシャワーのところへ行って、さっさと自分のあわを洗い落とすと——アカ

ンベエをしてから、とつととにげて行った。

「いったい、なんだったんだよ」

頭の中がグチャグチャのまま、僕はかけ湯であわを流した。もう湯につかる気分じゃない。美鈴ちゃんがいなくなってるのを確認してから、僕もバスルームを出た。だつ衣室には、美鈴ちゃんのパンツが落ちていた。素っぱだから自分の部屋まで行ったみたいだ。ちょっと考えてから、パンツは洗たくカゴに放りこんだ。

下着を変えてパジャマを着て、今のエッチなハプニングを伯父さんにでも伯母さんにでも知られたら、しかられるのは僕かな、美鈴ちゃんかな。それよりも、美竹さんに軽べつされたくない。

リビングにはもどりたくなかったけど、お休みなさいのあいさつだけはちゃんと言って、自分の部屋へにげ帰った。

翌朝には美鈴ちゃんは、バスルームでのエッチなイタズラなんか忘れたみたいで、これまで通りに（ということは、僕に対してじゅうぶんわがままに）ふるまっていた。伯父さんも伯母さんも美竹さんも、バスルームでのことは何も言わなかった。

僕も新しい学生生活が始まって、美鈴ちゃんのことばかりかまってられなくなった。美竹さんにはかまってほしいんだけど、美鈴ちゃんが僕をあれこれかまうのを、一步はなれた所からながめてるって感じで——れん愛で、思うようには進まないもんだね。

美鈴ちゃんのほうは、思うように進んでるんじゃないかな。しばらくはおとなしく、ひとりか美竹さんといっしょにおフロを使っていたけど、翌週にはまた乱入してきて。エアマットとかは使わず、僕に背中をもたせかけるだけで満足してくれた。僕もそれを受け容れて、週に一度は美鈴ちゃんといっしょにバスタイムというのが、新しい習慣になっていた。

最初に美鈴ちゃんが言ったち「小っちゃ……」が、だれと比べてなのかは、おそろしくて追きゆうできないままだった。

## 入部の儀式

伯父さんは名門私立校へ入学させたがっていたけど、僕は地元の公立を絶対的に希望した。だって、私立校にはサッカー部がなかった。サッカー少年団で3年間がんばってきたんだから、進学しても続けたい。それでも、校則でボウズ頭にしなくちゃならないんだったら、すこしは考えたろうけど、さいわいにそれはなかった。ので、進学を機にボッチャンガりをやめて、スポーツガりにした。あまりちがわないけど。

ええと。ヘアスタイルじゃなくて、サッカーの話だったっけ。

サッカーが理由で選んだ進学先だから、迷うことなく入学式の日に入部を申しこんだ。最初は仮入部で、2週間の体験をしてから正式な入部届を出す。どこのクラブも同じだけど、特にサッカー部はこの手続きが必要だと思った。というのも。大人気の少年マンガ『キャプテン翔』のせいで今年の入部希望者は63人、去年の5倍以上になった。運動部の経験がなくて体育の授業以外ではサッカーをしたことがないやつとか、マン研（この学校には無いけど）のほうに向いてるやつとか——最初の1週間で3分の2がだつ落した。

そして、今日。正式の部員を向かえる初日は練習が無くて、伝統になっている『入部儀式』が部室で行なわれる——とだけ、聞かされてた。どんな儀式かは秘密だそうだ。

15人の先輩と新入の12人とが向かい合って立つ。先輩はサッカー部のユニフォーム。僕たちは、まだ体操服。

「新入部員はパンツをぬげ」

列のはしで入口をふさぐように立っているカントク（こ問）の塩田先生が、とんでもないことを言った。僕をふくめて、新入部員一同ぽかんとしてる。

「おまえら、耳が無いのか。フルチンになれ」

3年生のキャプテン（川内愛仁<sup>かわちあいと</sup>さん）に、どやしつけられた。

僕は体操ズボンとブリーフをまとめて引き下ろした。少年団でも、先輩と後輩とで集団チンチン比べとか、ふざけ半分でしたことがあったから、わりと平気だった。まあ、コーチやカントクが立ち会うってのは、これが初めてだけど。

僕がぬいだので、他の新入部員もぬぎ始めた。

「気ヲツケ」

塩田先生の号令に、しぶしぶ新入部員が従う。チンチン丸出し。修学旅行でも、ここまでもろ見えになったことはない。先輩たちが、にやにやして僕たちを——というより、僕たちのチンチンをながめてる。

ううう……恥ずかしい。チンチンを見られてるのが恥ずかしいんじゃないなくて、12人中でいちばん小さいとばれたのが恥ずかしい。くそ。オトナみたいにもじゃもじゃしてるやつも何人かいる。ずるむけしてるやつも。

「右手でチンコを握れ」

何をさせるつもりなんだろう。でも、チンチンがかくれるから……かくれなかった。なぜか分からないけど、立ってしまった。手のすき間から皮のむけた先っぽがコンニチハ。

「おい……」

「ああ……」

先輩たちの視線が僕に集中した。ますます恥ずかしい。のに、ますます固くなってくる。

「オナニーをしてるやつは、手を上げろ」

オナニーって、なに？

だれも手を挙げなかった。

「まあ、いい。チンコを手でしごけ」

新入部員がざわめく。照れくさそうに笑ってるやつもいた。話の流れからすると、チンチンをしごくことがオナニーなのかな。

オナニーを知ってるらしい何人かが、右手を前後に動かし始めた。他の新入部員も見習う。僕もチンチンをこすり始めた。

なんだか、気持ちいい。またの間にチンチンをはさんで太ももをきつく閉じ合わせて海老反りをすると、気持ちいいのは知ってた（ときどきしてる）けど、こういうやり方は初めてだ。

半数くらいのチンチンが大きくなってきた。まったく変化の無いやつも何人かいる。

先生が大きなポスターを持ってきて、部室のドアに張った。ぼくたちよりちょっとお姉さんの……ヌード写真。海岸の大きな岩に横座りして、上半身を正面にひねっている。ので、おっぱいが丸見え。腰のあたりも、ぎりぎりまで見えている。

それまでふにゃふにゃだったやつも、太く長く固くなった。全員がボッキすると……くそ、やっぱり僕がいちばん小さい。ますます恥ずかしい。のに、ますます固くなって、旗ざおみたいに垂直に立ってしまった。

「こら、手を休めるな」

「でも……出ちゃいます」

先生にしかられたやつが、情けない声でうったえた。

「かまわん、出せ。ちゃんとシャセイできるやつは、それだけ成熟しているから見なして、準レギュラーあつかいをしてやる」

つまり、1年生のうちから試合のメンバーに入れてもらえる。それじゃ、僕も出さなくちゃ……て、オシッコ以外に何が出るんだろうか？

泣きごとを言ったやつが、激しく手を動かし始めて——白い『何か』をオシッコみたいにふき出した。オシッコとちがって、いっしゅんだったけど。

「おおーっ」

「やるじゃないか」

「飛ぶなあ」

先輩たちが、はやし立てた。

それに続いて、あと2人が白い『何か』をチンチンから飛ばした。

僕は……こすっているうちに、どんどん気持ち良くなって、そう言えば美鈴ちゃんのス

ジにはさまれたときの気持ち良さや似てるなと思い出したら——腰の奥で小さなぼく発が起きて、とたんに続ける気力が無くなった。手を休めても、しかられなかった。

結局、シャセイというのを出来たのは3人だけだった。先生がストップをかけるまで延々としごき続けて、僕みたいに腰がビクンッてならなかったのも5人いた。

「よーし。これで、おまえたちの成熟度は分かった。シャセイして部屋を汚した者は、ちゃんと後始末をしてから帰れ」

それで、正式部員としての初日は終わった。

歩いて帰りながら、あの白い『何か』はきっとセックスに関係があるんだと気づいた。セックスを通じて女性は男性から赤ちゃんの種をもらうと聞いた覚えがあるけど、もしかして、あれがそれだったんじゃないだろうか。

腰の奥のぼく発。あれがシャセイだったんだと思う。まだ僕が成熟してなくて、赤ちゃんの種が実ってなかったから何も出なかったんだらう。

美鈴ちゃんは、このことを知っていたんだと、不意にさどった。だから、「あたしと同じで、まだ」と言ったんだらう。女の子も、赤ちゃんの種を育てる準備ができると、ショチョウというのが出るそう。きっと、まだなんだらう。とすると、僕と美鈴ちゃんがセックスをしても、赤ちゃんが出来たりはしない。でも、美竹さんは……そこまで考えたところで、僕は「ワアアアアッ！」とさげんで思考を打ち切った。女神様をけがすようなフラチなことを考えてはいけない。

前を歩いてた人が、おどろいた顔で僕を振り返った。

## 従姉の悪戯

入部の儀式はびっくりしたけど、それ以外の学校生活は順調だった。算数が数学になって国語が現国と古典に分かれて英語が加わったけど、その分授業時間も増えたから、授業

に追いつけないなんてことはなかった。

伯父さんの家での生活にも、すっかり慣れた。美鈴ちゃんとの混浴も、バカ広いバスタブの中で身体を密着させてくるけど、それ以上のイタズラはしかけてこなくなったので、問題は無い（ということにしておく）。

そして、美竹さんとは……接点そのものが無い！

美竹さんは3年だけど、美鈴ちゃんと同じ一かん教育の女子校に通っている。登下校は伯父さんの会社の人が自家用車で送り向かえ。だから、と中までいっしょに歩くことすら出来ない。もちろん、美鈴ちゃんみたいに僕の部屋まで押しつけてきたりもしない。

5月の飛び石連休に一家そろってどこかへ遊びに行く予定でもないかなと——まさかイソウロウの身分でおねだりするほど凶々しくはないから、ひそかに期待してたけど、見事にかたすかし。姉妹共に短期集中レディースマナー講座とかで、伯母さんに引率されて足かけ3日の合宿。伯父さんと僕とでお留守番。遊園地と映画に連れて行ってもらったけど、遊園地は実の親子でも卒業する年令だし、映画は日本昔話の実写でつ学版みたいな感じで退屈だった。

——飛び石連休の次の週末に、美竹さんが美鈴ちゃんを入れ変わったみたいな事件が起きた。伯父さんも伯母さんも、にこやかに見守ってる感じだったから、事件だと思ったのは僕だけなんだけど。

伯父さんと伯母さんがいっしょに入浴して、その後に僕がひとりで入って、それから美竹さんと美鈴ちゃんがひとまとめ。

僕はパジャマの上にセーターを着て、LLLLDDKKKで伯父さんたちといっしょにテレビを観ていた。『スター・ワーズ』の再放映だから大画面が見応えあるし、まだちょっぴりぎこちないけど一家団らん。

そこに、おフロから出たふたりがもどって来た。ちらっとそちらを見て、僕は息を飲んだ。

おフロ上りはパジャマというのが、この家のルール。すぐにねないときは、パジャマの

上に何かを羽織る。伯父さんも伯母さんもワードローブという洋風の和服みたいのを着ている。伯父さんは前をはだけてて、伯母さんはきっちり前を合わせてベルトを結んでいるというちがいはあるけど。僕は、さっき言ったようにパジャマとセーター。

美鈴ちゃんはスカートが長いピンク色のワンピースみたいな。ネグリジェっていうんだっけ。いつものやつだ。とてと僕のとこへきて、横に座った。

そして美竹さんは……ネグリジェと似てるけど、スカートがすごく短い。ふんわりした生地がすけていて……うわ、ブラジャーを着けてない。ので、おっぱいが見えている。しかも前が割れていて、おへそが丸見え。しかもしかも、パンツもはいてない……んじやなくて、スジの部分小さな逆三角形の布で包んでる。逆三角形の頂点からヒモが出ていて、それを腰に巻いている。

「……………?!」

美竹さんは、いつもと同じ優がな足取りで近づいて来て、僕をはさんで美鈴ちゃんの反対側に座った。3人がゆったり座れるソファナーなのに、美鈴ちゃんと同じように、身体を寄せてくる。

伯父さんと並んで2人がけのソファナーに座っている伯母さんが、テレビから目を放して美竹さんを見たが、何も言わない。

「あ、まだやってたんだ。裏番組の歌ようショーを観たかったのにな？」

「ちゃんとビデオ録画している。後で観なさい」

ふたりの女の子にサンドイッチにされている僕を見て、伯父さんは「おやおや」といった表情。

「均くんはもてるな。いっそ、ふたりまとめてヨメにもらってくれんかな」

「いやですよ。大岡裁きじゃないけど、両側から引っ張られたら腕がぬけちゃいます」

じょう談にはじょう談で返しておく。

「だいじょうぶ。引っ張ったりしないもん。ほら、今でも逆におしつけてるでしょ」

美鈴ちゃんが、ますます身体をおしつけてくる。横へにげると——僕が美竹さんをおす

形になって。でも、美竹さんはにげない。ので……まるで、美竹さんのやわらかい身体に  
めり込んでいくみたいなさっ覚にとらわれた。

「あの……美竹さんのネグリジェ、ろ出が多過ぎると思いませんか？」

うわ、なに口走ってるんだろ。心では思ってるけど、言うつもりなんかなかったのに。  
美竹さんは気を悪くするだろうし、伯父さんは……

「美竹も、ようやく色気づいてきたかな。均くんのおかげかしらんな」

娘を前にして、そういうことを言う？

「レディーズマナー講座で学んだの。常に男性の目を意識した装いをしなさいって」

それ、意味がちがうと思う。どうちがうかは、僕は講座を受けていないから説明できな  
いけど。

「ボディタッチも、TPOをわきまえれば男性と親密になれるそうね」

美竹さん、僕の手を取って……太ももに導いた。

この家に来て1か月半、別の数え方をすれば5年ぶりに、美竹さんのはだにふれた。す  
ごくスベスベしてて、すごくやわらかい。こうしてみると、美鈴ちゃんの身体はコリコリ  
してるなって分かった。もちろん、僕よりはずっとやわらかいけど。

ドジャーン！

テレビが大音量になって、びくっと目を上げた。CMが始まっていた。美竹さんが僕の  
手にふれてから、視線はそっちを向きっぱなしだった。つまり……この10秒間くらいは、  
美竹さんの太ももと（正直に告白すれば）そのもうすこし上に目を吸い寄せられていた。  
ちっちゃな逆三角形の布……。

美竹さんが僕の手をはなして、でも腕を押さえ込むみたいにして、太ももの内側にさわ  
ってきた。パジャマの上からなのに、ふれられているところが熱く感じられる。

美竹さんの手が上にすべってきて……

びくんと、僕は震えて。固まってしまった。美竹さん、チンチンをつついてる。

「あら……ちっとも固くなってない。わたして、そんなにみ力ないのかな？」

あります。美鈴ちゃんとは比べものにならないくらい。だから、チンチンが立たないんです。好きな子に告白をしようとするのがアガってしまうのと同じです。なんて、スラスラ言えたらいいのに。いや、『チンチン』なんて絶対に言わないけど。

「ねえ、どうなの？ それとも、むつつりスケベさんかな？」

うわ……わしづかみされた。くにくにくと指が動いて、本体を探り当てられて、握られた。親指と中指でサオをつままれて、人差し指で先っぽをくすぐられる。

そこまでされると……固くなるだけじゃなく、いきなり腰の奥が熱く暴発した。

全身から力がぬけて、美鈴ちゃんにもたれたかってしまった。

「くふっ……」

美竹さんが小さく笑って、すいと立ち上がった。

「それじゃ、お休みなさいませ。お父様、お母様。それと、むつつりスケベさん」

リビングから出て行く美竹さん。『お父様、お母様』と『むつつりスケベさん』の落差が、美竹さんの中での僕のポジションを明白にしてる。

「待ってよお、お姉ちゃん。あたしもいっしょにネンネするう」

わざと（だろう）子供っぽい舌足らずな言い方をして、美鈴ちゃんも後を追った。

娘のエッチなふるまいを見て、親としてはどう思ってるんだろうか。僕はテレビに視線をもどすふりをしながら、伯父さんと伯母さんをぬすみ見た。ふたりとも、ほほ笑んでる。

（……………??）

僕は、この家の仕来りについて何か重要なことを見落としているのかもしれない。伯父さんの会社への行き帰りは家族全員がエントランスに並んであいさつをするし、伯父さんが「いただきます」を言うまで食べないで待っているし、おフロも順番が決まっている。ほうけん制度かと思うくらい、エチケットやマナーにうるさい。なのに、娘がいとこにエッチなイタズラをしても平然としている。

そう言えば。伯父さんと伯母さんがいっしょにおフロを使うこともある。小学校高学年のころは、たいていの家ではひとりずつだったと思う。親といっしょに入るかって話題は

ときどき出てた（いっしょのやつは『赤ちゃん』だとからかわれた）けど、父と母がいっしょかどうかというのは……はっきり覚えてない。案外と多いんだろうか。

そんなこんなを考えているうちにも、美竹さんのエッチなネグリジェ（？）姿が頭の中を飛びまわる。そして身体のほうは美竹さんのやわらかさとか指のしなやかさとかの感覚が残っていて——気がついたら『スター・ワーズ』はとっくに終わって、夜のニュース解説番組になっていた。

「あ、僕もいい加減でねなくちゃ。お休みなさい」

ぎくしゃくと立ち上がって、ふたりに向かってきちんとあいさつをして。自分の部屋へにげ込んだ。

美竹さんのイタズラは、それからもくり返された。あんなにきわどいネグリジェは一度きりだったけど、思い出したようにときどき、セクシーな部屋着を僕に見せつける。

ブリーフとあまりちがわないサイズのホットパンツだったり（パンティのふちが、はみ出てた）、ふつうのブラウスだけどボタンを留めずにすそをへそよりも上で結んでたり（ノーブラだったから、乳首はぎり隠れてたけど、その内側のふくらみはもろ見えだった）、大きめのTシャツ1枚でスカートをはいてなかなかだったり（まさかノーパンじゃないよね？）。そういう流れだと、なぜか体操服でくつろいでいても、すごくエッチに見えてしまった。もすこし暑くなったら水着姿も見せてくれるかなと期待しちゃうよ。

見せてくれるのは……うれしくないなんてことは絶対になんただけど（我ながら屈折してるなあ）。そういう服装をしたときは、必ず僕のチンチンが立っているかを（手でさわって）確かめる。立っていなかったら、つまんだりグニグニしたりして強制的に立たせる。セクシーな姿に僕が興奮してるのを確認すると満足して、それ以上のエッチなイタズラはしない（してくれない）。

持て遊ばれてる。だけど普通の姿のときは、これまで通り（以上に）おしとやかで優がな立ち居振るまい。四六時中僕にくっついてあまえてくる美鈴ちゃんを、遠くからながめ

てる。

セクシーな服装は、女神さまの気まぐれ、かな？

## 土曜の特訓

5月に入ると、サッカー部での僕のポジションが明確になってきた。少年団で3年のキャリアが物を言って、技術的には他の新入部員より一頭地をぬきん出てる。自画自賛じゃなくて、先輩も認めてくれてる。ただ……体格とスタミナがなやみなんだ。少年団のときは下級生も混じってたから目立たなかったけど、今度は僕が最下級生。

1年生と2年生との体格の差は、小5と小6よりずっと大きい。オトナの中に混ざった子供みたいな感のある1年生のうちでも、僕より背が低いやつは2人しかいなかった。

過去形にしたのは、入部の儀式でおじけづいて辞めた3人の中に、背の低い2人のうちの1人がいたから。今では、僕がブービー（ケツから2番目）。ドンケツのやつは未経験者で基本技術もアヤフヤだからメンバーに選ばれる可能性はないけど、僕はちがう。タッパが新入部員の平均値くらいあれば、じゅうぶん戦力になれる。まあ、体格に比例してスタミナもしょぼいから、フルタイム走り回るのは無理かも。

入部の儀式で射精できなかつたので準レギュラーあつかいではないけど、練習試合でバツキしてもらえる可能性はある——と思っていたのに。中間テストの直後にあったとなりの学校との練習試合では、補欠の予備にも選ばれなかつた。

そして全国サッカー大会の予選まで1か月半を切った、ある日。部活の後で居残るように、塩田先生から言われた。

先輩たちは、にやにやしてる。ただひとり川内キャプテンだけは、僕を通りこして遠くを見つめてるような眼差し。

(……………?)

とにかく。がらんとした部室でユニフォーム（ゼッケン番号は無い）を着たまま、先生と向かい合った。

「10分間に限れば、佐渡にかなう1年生はいない。ここぞと言うときのかくし玉として、メンバーに加えてやろうと思っている」

『ね耳に水』って、うれしいときにも使えるんだっけ。

「しかし、他の1年生は納得しないだろう。個人名はひかえるが、18人わくのボーダーライン上にある何人かは特にな」

岸田さんと大石さんと……

「体格はどうにもならんが、スタミナと筋力はすぐにでもきたえられる。毎週土曜日の午後に特訓をしないか」

「はいッ、お願いします」

考えるより先に返事をしていた。考えたって同じだけど。

というわけで。土曜日になって、第1回目の特訓。

「サッカーに限ってのことではないが、スポーツの基本は足腰だ。短期間に最大の効果を得るために、特別なきたえ方をする」

いきなり、サッカーパンツとブリーフをぬがされた。恥ずかしいとは思わない。入部儀式でめんえきがついてる。というより。県大会あたりでも、ロッカーが足りなくて、女子でさえスタジアム外周の物陰で堂々と着変えたりするそう。それに、体操のレオタードなんか、身体のラインが（どころか、胸ポチもスジも）くつきりだし。はだかを恥ずかしがってちゃ運動部なんか、やってられない。んだけど……

「やらせるのはタイヤ引きだが、腰全体に負荷を分散させる」

腰にロープを巻かただけじゃなくて、腰の前から2本のロープを垂らしてチンチンをはさむ形で後ろへ引き上げて——なにかゴソゴソしてるなと思ったら、大きな結びゴブをお尻のあなに押し付けられた。

「え……何を？」

「腹に力を入れ過ぎるとダッコウ、ケツから腸が飛び出す危険がある。その予防だ」

塩田先生は体育教師だし、学生時代は国体にも出場してるし、3年前にこの学校へ来てからは、15対0なんてテニスみたいなスコアで第1戦敗退してたサッカー部を、県大会準決勝まで引き上げた。その先生の言うことだから、きっと正しい。

結びコブをうんと食い込ませてロープが引き上げられ、後ろで腰に結ばれた。それから——ロープの毛羽がブリーフの裏側に残るとはだがかぶれるので、サッカーパンツを直ばきした。

校庭はそこそこ（県大会レベルでは）強い野球部が使っているのので、後ろに長いロープを引きずって、校舎の裏の空き地へ行った。すでに大きなタイヤが3本も準備されてた。ダンプカーのタイヤだと思う。3本を三角形に配置して、腰から延びるロープにつないで。

「まずは、ゆっくり引っ張れ」

はあい……ぐぬううう……足がスリップする。

「もっと腰を落として、地面をふみしめるつもりでふん張れ」

ぐおおお……無理。

「ちょっと待ってろ」

先生が部室からリュックを取ってきた。背負うと、ズシリではなくズウウンと重い。

ぐうううっ……ずる、ずりり。動いた。

まさつ力=重さ×まさつ係数

科学的なトレーニング方法（かな？）。

「足を止めるな。引っ張り続けろ」

動まさつ<静まさつ

こん身の力で引っ張る。腰骨とソケイ部にロープが食い込む。2本のロープにはさまれるチンチンの付け根がしめ付けられる。なぜか、後ろへ引っ張られてるはずの結びコブまで、おしりの中に——そうか、腰のロープに結びつけられてるから、ななめに引き上げ

られてるんだ。

空き地のはしにとう達したら、呼吸を整えている間に先生がタイヤをかべ際まで動かして。反対側のはしまで、また引っ張る。1往復しただけで、足はガクガク。

「過負荷トレーニングは、ここまでだ」

ええっ、もう終わり？

じゃなかった。部室にもどってロープをほどいてもらって。フルチンのままで、ベンチにうつぶせ。

「筋肉と関節に無理をしたからな」

先生がマッサージをしてくれる。太ももをもみほぐし、ロープですれた腰には濡れたタオルを当てて、くすぐるみたいに。おしりを強くもまれるのは、ちょっと恥ずかしい——なんて、女の子じゃないんだから。大でん筋は、身体を支える重要な筋肉。

「よし、あお向けになれ」

うへえ。これは男の子でも恥ずかしい。くり返すけど、フルチンだもの。入部儀式でも見られてるけど、今度は何十センチで至近きより。まあ、女子体操のコーチなんか、レオタードごしとはいえ、ポチやスジ……チンチンがカマ首をもたげかけたので、あわてて無念無想。かくしたりするとかえってエッチ方面に連想が働くので、手は両わきに置いてまな板の上のコイ。

太ももの前側をぐいぐいとマッサージ。足首をつかんで持ち上げ、足を曲げ延ばししながらふくらはぎをやわらかくもんでもらう。

ふくらはぎのマッサージが終わると、両足を思い切り折り曲げられた。つま先がベンチに届いた。

「自分で足をつかんで、その姿勢を保っている」

先生が位置をずらして、僕のおしりを真正面からのぞき込んだ。

「縄が食い込んで傷付いていないか、見ておかないとな」

見るだけじゃなく、指でつかれた。

「きれいなアヌスだ。均整の取れたしわが放射状に広がっている。これなら、無理をしてもチになるけ念はない」

無理をするって……タイヤの本数を増やすのだろうか？

お尻のあなの点検が終わると、足を開いたままあお向けの姿勢にもどされた。

先生の手がすつと腰に延びてきて……うわわわっ？！

玉とチンチンをひとまとめに、大きな手に包まれた。

「え……あの……？」

指先で玉ぶくろの根元をつかまれて、手の平で全体をもぎゅもぎゅともまれた。

「背だけに比例してチンコも可愛いな」

男にとって『可愛い』はほめ言葉じゃない。この場合は特にそうだ。クラスメートに言われたら、売られたケンカは正札価格で買ってやる。相手が先生、しかも気元を損ねたら試合に出してもらえないから、無言でがまん。

「射精もできないガキチンコだ。しかし……」

チンチンを上向きにお腹の上に乗せられて、手の平で先っぽをこすられた。

そんなふうにされると、エッチなことを考えなくても恥ずかしくても、大きく固くなってくる。

「大きくなると、他の新入部員といい勝負だ」

「なぐさめてくれなくて、いいです」

「ウソではない。だいたい、他人のチンコは横から見るが自分のは見下ろすから、小さく見えるものだ。もっと自信を持て」

そうだろうか。僕は納得のいかない顔をしていたんだと思う。

「疑うなら、先生と比べてみる」

先生が立ち上がって、ジャージをぬいだ。水着のサポーターみたいな、きつきつのパンツ。それもぬぐと——マーブルチョコのつつみみたいなチンチンが、でろんと垂れ下がっている。

「……………」

「大きく見えるだろう？」

僕のチンチンの3倍はある。

「目のさっ覚というやつだ」

先生がのしかかってくる。両手をベンチについて腰を押しつけてくる。チンチンとチンチンが密着する。

美鈴ちゃんのスジにはさまれたときのことを思い出した。あんなに気持ち良くない。でも、どうしてもエッチな気分になってしまう。いっそう固くなってドクンドクンと脈打つ。

「さわって比べてみる。そんなにちがわないと分かるぞ」

他人のチンチンをさわるなんて気色悪い……けど、先生には逆らえない。ふたりの身体が密着しているすき間に手をつつ込んで……ほんとだ。僕のほうが大きいくらいだった。もちろん、僕は最大限にボッキしてるし、先生は平常……じゃなくなってきた。

僕の手がふれたせいか、じわあっとふくれて固くもなってきた——さわってる感じでは、ラムネびんくらいになった。

「仕上げにチンコもマッサージしておいてやろう」

先生は僕の上から降りて、横にひざ立ちした。僕の腰におおいかぶさってきて——僕のおチンチンをぱくんと食べた。

「汚いです。やめて……むうう」

手の平で口をふさがれた。ので、分かってしまった。

外に声が聞こえたら、まずいんだ。ということは……これはトレーニングじゃなくて（かねているかもしれないけど）エッチなことなんだ。男同士でエッチなことをするなんて、ホモってやつだ。

エッチなことをしたら、親にも先生にもしかられる。なのに、先生がエッチなことを教え子にするなんて……ものすごくいけないことだと思う。だけど、やめてくださいって言えなくなった。口をふさがれてるからじゃなくて……

「んんん、ん……」

先生の舌がチンチンをなめるのが——美竹さんにくすぐられるより、美鈴ちゃんのスジにはさまれるより、何倍も気持ちいい。チンチンの先っぽは、キノコみたいに段がついてる。そこをなめられると、ぞくぞくっと背筋が震える。オシッコの出るあなをつつかれると、くすぐったいけど気持ち良くてちびりそうになる。

チンチンをなめるだけじゃない。空いている手で、玉ぶくろをコリコリとやわらかくもんだり、お尻のあなの手前をくすぐったりする。くすぐったいけど、もっとくすぐってほしい。

「もう、大声は出さないな？」

耳元にささやかれて、僕はコクコクとうなずいた。

口をふさいでいた手が動いて——乳首をつまんだ。女の子じゃないんだから、胸をさわられたって平気……じゃない！ つめの先でくすぐられると、そこから肩にかけて、静電気みたいなのが走った。びくっと身体が震えて、でも、じっとしていた。もっとくすぐってほしいから。

「あ、ああ……」

だれかがかん高い声でうめいてる……と思ったら、僕自身だった。気持ち良すぎて、自然と声もれてしまう。そうか、こういうのをあえぐっていうんだな。オトナ向けのエッチな雑誌で読みかじった知識が頭にうかんだ。でも、そんな知識の断片はすぐにはじける。気持ち良いのがどんどんふくれ上がって、何も考えられなくなって……

「ああ、あっ……?!」

腰の奥からチンチンの先っぽに向かって、ケイレンが走りぬけた。美竹さんや美鈴ちゃんにイタズラされたときと同じ感覚だ。でも、何倍もすごかった。

「はあああ……」

全身から力がぬけてしまうのも同じ。ばく発が大きかったから、反動も大きい。

先生が立ち上がった。チンチンが空気にふれて、ひんやりする。ちょっと気持ち悪かつ

た。

先生は僕を見下ろして、何か考えてるみたいだったけど。

「よし。今日の特訓は終わりだ」

なんだか、つき放したような言い方をされた。まだ1時間ちょっとしか経ってない。

「最初から根をつめると良くない。じょじょにきつくしていく。来週も特訓を受けるな？」

なんで、そんなことを聞くかなと思って。これが、ただの特訓じゃないと僕が感づいたと、先生も分かっているんだろう。来週も特訓を受けますと言えば、それってつまり……今日みたいな『マッサージ』も受けますって意味になる。

こんなことは良くないと思う。こんな『特訓』は今日限りにしなくちゃいけない。でも、そうしたら……メンバーから外されるかもしれない。

質問しようとは思わない。『そうだ』と答えられて、それから『特訓』を続けますって言えば、ホモを受け容れる見返りにメンバーに入れてもらうみたいな、打算的な関係になってしまう。そんなのは、いやだ。

それに、本音を自分でも認めたくはないんだけど。こんなことをしてはいけないと分かっているんだけど。「じょじょにきつくしていく」というのは、タイヤ引きのことじゃなくて『マッサージ』のことだろう。どんなことをされるのか、興味がある。今日よりもっと気持ちいいことをしてもらえるかもしれない。

僕はベンチから起き上がって、さすがに恥ずかしくて前を手でかくして。

「はい、よろしくお願いします」

頭を下げてしまった。

翌週の特訓は、たしかに最初より格段にきつかった。先生が僕のチンチンをしゃぶってくれるんじゃなくて、僕が先生のをしゃぶらされた。

「精液は、生命そのもののタンパク質のかたまりだ。筋肉増強に、これ以上の栄養補給はない」

エッチな意図を隠す言い訳だってことは明白。だけど僕は素直に先生の指示に従った。エッチなことはいけないことだし、ホモはもっといけないことだ。いけないことをするのって、すごくスリルがある。それに、だれにも迷わくをかけない。ばれて恥ずかしい思いをするのは、僕と先生なんだから。

仁王立ちになった先生の前に、下脱ぎのままひざまずいて。あーんと口を開けて、パッくん。けだものっぽいような、天日に干された海草のようなおいが鼻にあふれた。チンチンなんて可愛いもんじゃなくて、せいぜい半分くらいしか口に入らないペニスは、ちょっぴりしょっぱかったけど、気持ち悪くなったりはしなかった。

「ただくわえているのではなく、しゃぶってくれ。もっと舌をからめるように。カリクビの裏に縦筋があるな。横になめて……カリクビもレロレロ。くちびるをすぼめてアムアムしてくれ」

注文が難しい。でも、先生にほめられたいので一生懸命。脳震倒を起こしそうになるのも我慢して首を振って、ペニスを口から出し入れした。

努力のかいあって——5分くらいで、先生は射精した。

先っぽがぐっとふくれて、ビクビクッと脈打つと同時に、のどの奥に水テッポウを打ち込まれたみたいな感覚があって、あわてて息を止めた。それでも、ひょう白材みたいなもっと生ぐさいにおいが、口にも鼻にも広がった。

タンパク質の摂取が目的（という口実）だから、精液を口元までもどしてから飲み込んだ。すごくいがらっぽくてのどに引っかかった。後でうがいをして、いがらっぽいのは消えなかった。

射精した後で、先生は僕のチンチンも食べてくれた。チンチンがビュクビュクッとするのは先生と同じだったけど、精液は出なかった。

——週明けに予選へ向けたメンバーの発表があって、僕はセンターフォワードのスタメンにバッテキされた（前半のどこかでレギュラーの2年生と交代）。

塩田先生のサッカーは、20年以上も古い4-2-4体制。攻げきを厚くして、とにか

く先制点を取りに行く。サッカーは得点を挙げにくい競技だから、先制された敵があせつて無茶な攻めきをしてきたら、フォワードの4人もハーフバックと共同して守備を固める。数字で表現すると0-6-4という前代未聞の変則フォーメーション。

守備を固めるころには、僕は引っ込んでいる。僕に求められる役割は、小がらな身体とサッカー少年団できたえた技術とで敵をかき回して、もうひとりのセンターフォワードにボールをつなぐこと。しゅん間の判断力も求められる難しい役割だ。

先輩たちは、先生がホモで部員に手を出していると知っているらしい。でも告げ口なんかしないのは、サッカーの顧問教師として先生以上の適任者が学校にいないから。

先生のサッカー指導者としての評判を落とさないためにも、僕がエコヒイキで選ばれたんじゃないって認めてもらうためにも——これまで以上に熱心に部活に打ち込んだ。30分は居残って、持久走とかダッシュとか、体力作りにはげんだ。

月水金の部活が終わって帰宅したら、速攻でシャワー。佐渡家の入浴日は火木土日（あんなバカでかいバスタブの水を入れ変えるのは大変だ）なので、実にドンピシャのローテーション。は、どうでもよくて。

特訓が始まったあたりから、W美姉妹（美竹さん&美鈴ちゃん）のイタズラが無くなった。あきてくれたんならうれしくてさみしいけど、中間テストが近づいたから。美竹さんの通ってる私学は2学期制。前期が9月までで、中間テストが6月下じゅん。僕の期末テストが始まるちょっと前の時期になる。

美竹さんは、伯父さんから言いつけられてる成績に達しないとペナルティがあるそうなので、いとこなんか、かまっちゃられない。お姉さんがピリピリしてるから、妹も自しゅくしてるみたいだ。といっても、僕が机に向かってても勝手に入って来て、ちっちゃなおっぱいを押しつけるようにしてのぞき込むくらいはするんだけど。それでもとにかく。この家でお世話になってから初めて、心安らかに過ごせた——と言ってしまっただけは、ふたりにゴメンナサイだね。

## メコ筋に鞭

僕のほうの期末テストが終わった日。夕食のときから、なんとなく重苦しいふん囲気だった。とくに美竹さん。相づちを打ったり機転の利いた受け答えはするけど自分から話題を振ったりはせず、少量ずつ口に運んではいていねいにモグモグ——は、いつもと同じだけ。今日はおしとやかで感じじゃなくて、何かにおびえてるみたいな印象だった。

伯父さん&伯母さん、僕、W美姉妹の順におフロを使って。

蒸し暑いので、僕はパジャマのズボンとTシャツ。伯父さんはパジャマの上を着ずにバスローブ、伯母さんはバスローブをきっちり身体に巻き付けて——ネグリジェがまったく見えていないから、もしかするとパンティだけかもしれない。なんて、フラちな想像もチラチラ。

だって、漢字で書くから伯母さんだけど、小母さんでもオバサンでもなくてオネエサマあたりがふさわしい。とても母さんと同じ年には見えない。フィットネスで引きしめてエステでみがいてる玉物だ。

それを言うと。伯父さんは8才も父さん（母さんの1コ上）と離れてて、見た目もそれくらいだけど、伯父さんのほうがパワフルに感じられる。体格とかじゃなくて、何て言えばいいのかな。僕たちの祖父の後を次いで、当時は小さな会社を切り盛りしながら、まだ大学生だった父さんを卒業まで面倒見てくれた生活力かな。会社の名前は創業当時をしのんで変わっていないけど、雑貨品の輸入会社を総合商社まで発展させたのも、伯父さんの力量と——父さんも、兄である伯父さんを尊敬している。

なんて、必死に伯母さんの胸元から目をそらせてると。W美姉妹も、おフロから上がってきた。

(……………?)

美鈴ちゃんは、いつも通りに可愛いネグリジェだけど。美竹さんは素はだにバスタオルを巻いただけのアラレもセンパイもない(ショックをギャグでやわらげてる)姿。美鈴ちゃんがポニテをほどいて長い黒髪を垂らしているのとは対照的に、髪はきっちりツインテにまとめている。

いつもの、僕をからかうセクシー衣装(?)かなと疑ったけど、やっぱりふん囲気が違う。トノサマの前にかしこまる家来みたいにきちんと、2人がけのソファの前に正座した。

美鈴ちゃんはいつも通りに、3人がけのソファで僕の横。いつもと違うのは、30センチほど身体を離してるところ。

「さて、中間試験の結果について、報告を聞こうか」

うわあ、厳しい。僕も……1週間後には、ひ告席に座られるのかな？

「現代国語は97点、古文は93点、数学は75点……」

美竹さんて優等生なんだ。理系が、ちょっと弱いかな。といっても、平均値上下の僕とはダンチ。さすがは女神様。なのに、美竹さんの声は震えてる。

「主要5教科の合計で415点。お父様と約束した450点には届きませんでした」

90点平均が目標！

「へん差値は55でしたから、60には5ポイント足りていません」

「すると、罰はどうなるのだったかな」

美竹さんの返事は、『入部儀式』でフルチンを命じられたときの百万倍もショックだった。

「お尻に35発の鞭と……メ、メコ筋に5発です」

鞭だって……？！

メコ筋って、つまり、女の子の縦スジだよね。初めて聞く言い方だけど、すごくエッチだ。美竹さんがそんな言葉を使うなんて……でも、恥ずかしそうに口ごもってた。そういう言い方をするように言いつけられてるのかもしれない。

だけど、女の子だって急所のはず。金けりとどっちが痛いんだろう。

「罰を受ける準備をしなさい」

「……はい」

僕がまん丸に見開いている目の前で、美竹さんが立ち上がった。こんなときでも優がな  
仕草でバスタオルをはぎ取って、また正座してからたたんだ。改めて立ち上がると、伯父  
さんたちに正面を向けたままパンティまで脱いだ！

美竹さんのヌードを見るのも5年ぶり。美鈴ちゃんとの5年ぶりは平気だったけど、美  
竹さんとの5年ぶりは、ひと目見たしゅん間から心臓がドギマギ。そして、いきなりの展  
開に、僕は固まってしまった——から、視線も動かさなくなった。ということにしとく。

まるで、グラビアアイドルのオールヌード（なんて見たことないけど）。形良く半球形に  
盛り上がった乳房も、白い下腹部も——何もかもが、シャンデリアのきらめきの下にさら  
された。下腹部に黒い陰りは無かった。そういう体質なのか、オシャレで手入れしてるの  
かは分からない。

「はしたない声を出せないようにしてもよろしいですか？」

「ふん。均くんに聞かれるのは、恥ずかしいか」

いきなり名前が出てきて、僕は我にかえった。

「あ、あの……僕、部屋へもどります」

「ここに居なさい」

美竹さんに対するよりもずっと厳しい声で言われて、うかしかけていた腰が、ストンと  
落ちた。

ななめ横であたふたしてる僕は無視して、美竹さんは脱いだばかりのパンティを丸めて  
口につっ込んだ。声を出せなくするそく席のサルグツワだ。

それから。部屋のはしまで行ってから後ろ向きになって、両手を頭の後ろで組んだ。そ  
のまま動かない。

伯父さんが立ち上がった。不意の動作にビクッとしたのは僕だけだった。伯父さんは広  
いリングを横断して。これまで（すくなくとも僕は）開けたことのない戸だなから鞭を

取り出した。サーカスでライオンやトラをおどすときとか、洋画の時代劇で奴隷に使う、細長い鞭。何重にも巻かれているのを延ばすと、2メートル以上になった。

美竹さんの2メートルくらい後ろに伯父さんが立った。

「均くん」

「は、はいっ」

名指しされて、返事の声が裏返ってしまった。

「鞭打ちの数を数えてやりなさい」

「え……あ、はい」

人に命令するのに慣れた声。僕は逆らえなかった。ふたりが立っているのに僕だけが座っているのは横着に思えたので、僕も立ち上がった。

しん判みたいな位置取りがいいかなと考えて、ふたりの中間に、鞭が振るわれる空間をさけて立った。そして……伯父さんをななめ前から見て、気づいてしまった。伯父さんのバスローブが、はっきりと盛り上がっている。実の娘のはだかを見て、エッチな意味で興奮してるんだ。

「始めるぞ」

ひゅんっ……パチイン！

思っていたよりも大きな、お尻をたたく音。びくっと、身体がすくんでしまった。

「早く数えてやりなさい」

うながされて、我に返った。

「あ、ひとつ……です」

「しっかり数えなさい。きみが間違えると、最初からやり直しになるよ」

「ええっ……はい」

ひゅんっ……パチイン！

「ふたつ！」

さげんでいた。僕がオタオタバクビクドギマギしているのに比べて、美竹さんは平然と

(ではないと思うけど) たえている。うめき声ひとつもらさない。

ひゅんっ……バチイン！

「みっつ」

ひゅんっ……バチイン！

「よっつ」

ひゅんっ……バチイン！

「いつつ」

美竹さんのお尻に、真っ赤な筋が刻まれていく。鞭の先がドングリみたいにふくらんでいるから、はだを切りさかれることはない。その代わり、痛みは大きいんじゃないだろうか。

ひゅんっ……バチイン！

「にじゅうさん」

ひゅんっ……バチイン！

「にじゅうよん」

伯父さんはフォアハンドとバックハンドを使い分けて、左右のお尻を均等に鞭打っている。上下にも意図的に散らしている。ダメージの集中をさける配りよだろう。

美竹さんのお尻は全体が真っ赤に染まっている。

ひゅんっ……バチイン！

「さんじゅうご！」

全身から力が抜けて、へたり込みそうになった。のを、ふん張ってこらえた。鞭打たれた美竹さんがしゃんと立っているのに、みともない真似は出来ない。

これで罰は終わり——じゃなかった。

「次はへん差値の罰だな。正面を向きなさい」

ぐらっと美竹さんの身体がゆれた。のろのろと向きを変える。頭の後ろで手を組んでひじを張り、背筋をのばして両足を50センチほども開いた——のは、メコ筋を打たれ易く

するためだろう。でも、全身が小刻みに震えている。

「伯父さん……」

他人の家の教育方針にコドモの僕が口出しするのは生意気だけど、だまってられなくなった。

「テストの成績が悪かったからって、女の子のいちばん大切なところを鞭でたたくなんて、ひど過ぎると思います」

美竹さんが心配そうな目で僕を見た。けど、伯父さんは怒ったりしなかった。

「均くんは感違いをしているね。第一に、このペナルティは美竹自身が申し出たものだ。試験の目標もね」

特攻隊員は自発的な志願を強制されたって、何かで読んだことがある。

「そしてもっとも覚えておいてもらいたいのは、美竹がこのペナルティを喜んで受け入れているということだ」

「……喜んで？」

伯父さんが美竹さんに（キスできるくらいまで）近寄った。鞭を左手に持ち変えて、右手を美竹さんの割れ目にのばした。美竹さんのは美鈴ちゃんみたいな一本スジではなくて、貝の足のようなものが……今は、そんなびよう写をしてる場合じゃない。

美竹さんにはげない。伯父さんの指が、陰りの無い割れ目につき立てられた。だけでなく、ぐりぐりと中をかき回した。

伯父さんは指を抜いて、僕の鼻先につきつけた。ねばっと濡れていた。

「これがどういう意味なのか、均くんも知っているんじゃないかな」

知らない。傷口をいじったら、こんなジュクジュクした液が出る。伯父さんの指で（たぶんツメで）中が傷ついたんだ。

「知らないみたいだな。まあ、いい。本人の口から聞いてごらん」

伯父さんは美竹さんの口に（メコ筋に入れたと同じ）指を入れて、パンティを引っ張り出した。

「父親にセツカンされて、美竹はどう思っている？」

美竹さんはチラッと僕を見て、すぐに目をふせた。

「喜んではいません。でも、自分で決めた目標を達成できなかったのですから、自分で自分に罰をあたえないといけません。お父様の手をわずらわせて、申し訳なく思っています」

ほんとは違うことを言いたいけど、伯父さんに（それとも僕に？）えんりょしてる。そんな印象を受けた。

「メスあなをいやらしく濡らしているのは、なぜだ？」

メスあな……すごくヒワイ（エッチとは違う）な言い方だ。父親が娘に向かって言う言葉じゃないと思う。

「それは……メコ筋に鞭をいただくのはとてもつらいので、すこしでも痛みをやわらげようとして、自然と身体が反応しています。条件反射です」

「語るに落ちたな。メコ筋打ちにヨダレをこぼすまでに条件付けされていると認めたのだぞ」

「……………」

美竹さんは、きみょうな目つきで伯父さんを見上げた。うらめしそうな眼差し——という表現が当たっているかもしれない。

「均くんへのレクチャーは、ここまでだ。メスあなが熱いうちに鞭をくれてやる」

「はい……ありがとうございます」

美竹さんは口を引き結んで、ぐっと腰をつき出した。

伯父さんが右手に鞭を持ち変えて後ろへ下がった。ひゅんつと鞭をゆかにはわせて——しんちょうにきよりを調整している。

娘が父親に残こくなセツカンをされて、母親は平気なんだろうか。2人がけのソファを振り返って、僕はまたおどろいた。なんてもんじゃない。クリビッテンギョーだ。しつこいけど、ショックをギャグでやわらげてる。

いつの間にか美鈴ちゃんが伯母さんの横に座っていた。顔を伯母さんの胸にうずめてい

る。お姉さんがひどい目に合っているのを正視できない——んだらうけど。伯母さんの手が美鈴ちゃんのネグリジェのすそを割って、かぼちやパンツみたいなズボンの中に差し入れられていた。またのあたりで、もごもごと動いてる。これって、スジをいじってる——エッチな言い方をすると、愛ぶしてる。

美鈴ちゃんは、いやがってない。どころか、伯母さんのバスローブの中に手を入れて、やっぱり下半身をま探っている。

いったい、父親といい、母親といい……

「きひいいいっ……！」

かん高い悲鳴で思考がぐだけ散って。美竹さんに視線をもどすと——腰を引いてももを閉じ合わせていた。僕が目をはなしているうちにセッカンが始まっていたんだ。

伯父さんは鞭を垂らしたまま、美竹さんがもどえるのを無表情にながめている。

美竹さんが姿勢を立て直した。両足を開いて腰をつき出して——ゆかに垂れている鞭を見つめた。

鞭がゆっくりと後ろへ引かれて。美竹さんがくちびるをきゅっと引き結んだ。

伯父さんの右うでが動いて……ヒュンッ、パシン！

「きひいいいっ！」

鞭の先がメコ筋に食い込んだしゅん間、美竹さんの口から可愛い悲鳴がほとぼしった。反射的に腰を引いて、ももを閉じ合わせて、いたみにもだえている。

5秒ほどで、美竹さんが姿勢を立て直して。すかさず3発目が打ち込まれる。

「くううっ……」

今度は低くうめただけで、姿勢もくずさなかった。

4発目も同じくらいに軽い。伯父さんもかわいそうに思って手加減したのかな——なんて、とんでもなかった。

しゅんんっ、バチイン！

お尻をたたいていたときと同じくらいの大きな音。

「ぎゃああつ……！」

美竹さんがさげんだ。がくっとひざがくだけで……でも、ふん張った。頭の後ろで組んだ手も、そのままだった。

たっぷり10秒くらいは中腰の不自然なポーズでもだえていたけれど。ついに、元の姿勢にもどった。

「ありがとうございました、お父様」

そう言うように仕付けられているんだろうけど、不本意にはなくて、ほんとにそう思っているように聞こえた。

「良くがんばったな。均くんに無様な姿は見せられんといったところか」

え？ それって、どうい……？

「だがワシとしては、均くんにメスの本性を見せつけて、男は女をいかにあつかうべきか教えてやる義務がある」

また僕が引き合いに出されたけど——伯父さんの言っている意味が、さっぱり分からない。

「わずか5発とはいえ、最後まできちんと罰を受けたのだから、ホウビをやろう。クリ打ちも5発だ」

「いやです！」

初めて美竹さんが取り乱した。

「均くんに見られるのは、いやです。均くンを部屋へ帰してください」

「ダメだ。いつからおまえは、ワシの命令に逆らえる身分になったんだ？」

「……ごめんなさい。お父様の思うようになさってください」

弱々しい声で言うと、美竹さんは、いっそうピシッと背筋をのばした。

ひゅうん、バッシイイン！

それまでより1歩くらい近い位置から伯父さんが水平に振るった鞭は、美竹さんの左右の乳房を同時になぎはらった。

「きゃああっ……」

お尻に刻まれていたよりも太い筋が乳房に走った。鞭の中間あたりから先までが当たったんだ。

ひゅうん、バッシイイン！

ひゅうん、バッシイイン！

ひゅうん、バッシイイン！

それからの立て続けの3発には、美竹さんは無言だった。最初の悲鳴は、不意打ちへのおどろきだったんだろう。イスに画ビョウがあるのを知らないで座ったら飛び上がるけど、ずっといたいはずの注射はやせがまんできる。

「今のは、ワシに逆らおうとした罰だ」

おじさんがまた鞭をゆかにはわせて、メコ筋打ちのとき以上に真重に間合いを決めた。

そうか、『クリ打ち』だ。クリというのはクリトリスのことだろう。女の子のスジの上には小さなチンチンみたいな出っ張りがかくれていて、そこをさわるとすごく気持ちいいらしい——悪友から聞いたウワサはガセネタじゃなかったみたいだ。

え……あれ？

美竹さんの縦スジからちょこっとはみ出ている貝の足みたいなビラビラが、大きくなる。それと……ビラビラのはしっこに、真っ赤な宝石みたいなイボが見えている。もしかして、あれがクリトリスかな。ビラビラが貝の足みたいに見えるせいで、マテ貝を連想しちゃった。

「いくぞ……」

伯父さんが、ソフトボールの投球みたいな感じでうでを動かした。風切り音も無く鞭がゆっくりとゆかすれすれを走って、美竹さんの足元で上にはねた。

空振り……と、思ったけど。

「ひいひいひいっ……」

かん高い悲鳴。これまでのようなばく発的にはき出す悲鳴ではなくて、鼻に抜けるよう

な後を引く鳴き声だった。

「あああっ……」

これまでの激しい鞭打ちに気然と立ち続けていた美竹さんが、両手でまたを押さえて、ゆかにひざを着いた。

「まだアクメには達しておらんはずだ。立たなくていいから、手をどける」

美竹さんが、おずおずと両手を広げて、頭を反らせた。

音も無く鞭がゆかをはって、正確にクリトリスを打った（んだらう）。前屈みになってい  
るお腹をこすって、最後は鞭の先がゆう導ミサイルみたいに左へ曲がり、乳首をはじいて  
ななめ上へ抜けた。ねらった通りの動きだとしたら、すごいテクニックだ。

それだけ年季が入ってる。ということは……美竹さんは何年も前から、鞭打たれてきた？

「あうう……」

美竹さんは、またを押さえていない。両手で乳房を……もぎ取るみたいに激しくこねく  
っている。

しゅうん、バチイン！

鞭がメコ筋に食い込んだ。そのままはね上がって、鞭の先のドングリが真っ赤な宝石を  
打ちすえた。

「ぎゃはあっ……！」

美竹さんが、のけぞった。尻もちをついて、かべにもたれかかった。快感のさ中に激痛  
をあたえられた反応だと、僕にも分かった。

美竹さんは尻もちをついたまま、足を開いている。

そこをねらって鞭が、上からたたきつけられる。最初に見たときの3倍くらいに大き  
くなってクリトリスがひしゃげて……

「ぎゃわああっ……いいいい、もっと……ください」

僕は自分の耳も目も信じられなかった。優がで清そな（セクシー衣装のイタズラで、最  
近は印象が割り引かれてるけど）美竹さんが、女の子のいちばんびん感なところを鞭打た

れて、快感にもだえている。美竹さんって、マゾだったんだ。

サドマゾって、ホモ以上にアブノーマルだよ。変態だよ。

違う。美竹さんはマゾの変態なんかじゃない。きっと、伯父さんがサドなんだ。実の娘を調教するキチクなんだ。でも、マゾに調教された美竹さんは、やっぱり変態……じゃない。ほんとはイヤでたまらなくても、母親まで加担してるから、だれにも助けを求められなくて……僕が救出してあげなくちゃ。

「ああああっ……いいいいい！」

僕をいっそう混乱させるように、アルトのフォルテッシモが、広い部屋にひびきわたった。

10分間くらい、美竹さんはゆかにつつぶして快感(?)の余いにひたっていた。美鈴ちゃんは伯母さんのひざの上で抱きすくめられて、指でメコ筋(と、クリトリス?)をいじられていた。

「あんん……ダメえ。みすず、おかしくなっちゃうう」

舌っ足らずにあえいでるけど、美竹さんみたいにすさまじいもだえ方はしない。まだ性感が未熟なんだ。それとも、伯母さんがコントロールしてるのかな。

伯父さんは僕と並んで3人がけのソファで、タバコをくゆらせていた。

「女は、こういうふうにあつかうものだ。家族といえども、いや、家族だからこそだな」

「……………」

頭のなかがグチャグチャで、相づちも打てない。相づちを打ったら伯父さんの言葉を受け入れたことになる。

「だけど、男女は平等だって習っています」

なぜ平等かといえば、人間はみんな平等だからだ。

「戦争は絶対的に悪いとだれもが言いながら、現実にはあちこちで戦争が起きている。きれいごとではなく、現実を見なさい」

「……………」

「社会の現実、強い者が弱い者を支配している。肉体的にも経済的にも弱い立場にある女が男に支配されるのは自然の説理だ。その分、男は女を護り養ってやらねばならん」

伯父さんは、灰皿にタバコをねじ捨てた。

「ふたつばかり年上の美竹に手も足も出ず、美鈴にはほんろうされっぱなし。見ていて歯がゆくなってくる。美竹を妻に従えて、美鈴は愛人として飼う。それぐらいのかい性を持ってもらいたいね」

なんだか、とんでもないことをけしかけられてる。じょう談だろうと思うけど、さっきのセッカンを見てると、じょう談とばかりも言ってもらえない。

美竹さんが起き上がった。伯父さんに向かって、きちんと（はだかのまま）正座した。ので、話は立ち消えた。

「お仕置きしてくださって、ありがとうございました」

三ツ指をついて、頭を下げた。

「うむ。それで、期末テストの目標は、どうするかな」

「はい。今度こそ、5教科450点、へん差値60を目指します」

「達成出来るまで目標はすえ置きか。佐渡家の者が、そんな志しが低くて良いと思ってるのか？」

「いえ……」

美竹さんはうつむいてだまり込んだけど、すぐに頭を上げた。

「460点、へん差値62を目標にします」

「62とは中と半ばだな」

「……65を目指します」

これ、美竹さんが自主的に決めた目標っていえるんだろうか。60でも65でも5発しか違わないって、ヤケクソになったんじゃないかな。だけど、メコ筋に鞭だよ。5発と10発の差は大きいと思う。

「罰も同じでは、だれてしまうな。美竹は、そう思わないか？」

美竹さん、今度はどうもいたまま、いつまでも動かなかった。

「4年生にもなってオモラシをしたことがあったな。あのときは、どんなセッカンをしてやったかな」

「……クリトリスにオキュウしてください！」

美竹さんは顔をふせたまま、さげぶように答えて——ぶるぶると身を振るわせた。チンチンにオキュウをすえられると考えたら、背筋が寒くなった。のに、なぜだろう、チンチンがすこし固くなった。

「いさぎよいな。しかし、おまえはもう包皮切除をしているからな。本体にケロイドを残してはかわいそうだ。せんねんキュウでかんべんしてやろう」

「ありがとうございます。かん大な処置に感謝いたします」

美竹さんは額をゆかにすり付けた。

「おいおい……今からセッカン確定みたいにふるまうんじゃない。セッカンを受けずにすむように、死に物ぐるいでがんばりなさい」

なんて、簡単に言うけど。へん差値65って、上位5パーセントくらい。クラスのトップか次席。だけど、現国が97点。理数系をこく服できたら、美竹さんなら届くかもしれない。ちょっとだけ美竹さんがみじめに見えていたけど、やっぱり僕のあこがれの人だ。

「ところで……美鈴の目標は、どうだったかな？」

いきなりホコ先を向けられて、美鈴ちゃんが伯母さんのひざからずり落ちた。そのまま正座して、ハキハキと答える。

「はい。オール4以上。理科算数国語は5です。自信はあります」

「未達成の罰は？」

美鈴ちゃんが、ちろっと僕を見た。

「おかんちょうを1時間のがまんて、1点につき100ccです。3教科を落としたり、1点につき1時間の延長です」

これは、厳しいのかどうか僕には分からない。でも、もしも半数が3で音楽が2だったりしたら（だれのことだったか忘れたよ）、600cc以上になる。それだけの水を飲むのだから、お尻から入れるなんて……相当に厳しいのかな。

「アヌスストッパーの世話にならないよう、がんばれよ」

「はあい」

脳天気な返事で、僕も気が抜けちゃった。でも、アヌスストッパーで何のことだろう？

「よし。美竹への仕置きは、これで終わりだ。夜もふけた。子供は早く寝なさい」

「はあい。おやすみなさい」

「お休みなさいませ、お父様お母様、均くん」

美竹さんは何事もなかったみたいに、バスタオルを身体に巻いて（パンティは手に持って）リビングから出て行った。いつものように美鈴ちゃんが後を追う。

「どうした。均くんは、まだ寝ないのか」

「あの……僕は？」

さっきから引っかかっていた疑問を、思い切ってたずねた。

「僕には、目標とか罰とかは、無いんでしょうか？」

イソウロウというかゲストだから、別あつかいなのかな。

伯父さんが、大きくため息をついた。

「分かっていないようだな。きみは男だ。支配する立場だ。支配者は独立独歩、目標を他人に強制されたり罰をあたえられたりはしない。もっとも、ふたりにバカにされるような成績では話にならないがね」

ぐううう。実は僕へのプレッシャーが、いちばんきつかったりして。

でも、いいや。成績って、勉強だけじゃない。ふたりとも帰宅部だ。僕はサッカー部で……県大会優勝は、オール5より難しいかな。